

「結愛ちゃんを書き残した文章」

2018年06月11日

《 もうパパとママにいわれなくても しっかりと
じぶんからきょうよりかもっともっと あしたはできるようにするから
もうおねがい ゆるして ゆるしてください おねがいします
ほんとうにもうおなじことはしません ゆるして
きのうぜんぜんできなかつたこと、これまでまいにちやってきたことをなおす
これまでどんだけあほみたいにあそんだか
あそぶってあほみたいだからやめるので もうぜったい、ぜったいやらないからね
わかったね ぜったいのぜったいおやくそく
あしたのあさは きょうみたいにやるんじゃないで
もうあしたはぜったいやるんだぞとおもって
いっしょうけんめいやってパパとママにみせるぞというきもちでやるぞ 》

上記の文章は、親から日常的に虐待され、十分な食事を与えられずに亡くなった結愛ちゃんという5歳の女の子が自分のノートに書き残したものである。教育評論家の尾木直樹氏は「読み進めるのがとてもつらい文章」と評したそうだが、涙なくして読めない。

名前は、愛を結ぶ「結愛（ゆあ）」ちゃんと名付けられたのであるから、祝福されて生まれてきたのではないか。新聞には、母親が離婚し、再婚して義父となった男性から虐待され、それを止めることができなかつた、また、転居したことが、虐待を見過ごされたとも報道されていた。体を痛めつけられ、5歳児の平均体重よりも7キロも少なかったというから、どんなに痛く、お腹を空かしたことだろうか。結愛ちゃんは、両親に受け入れられようとひたすら許しを乞い、遊びをも止めて自分を鞭打ち、両親に愛される子どもになろうと必死に文章を綴っている。生きることを求める悲痛な叫びを一人で、背を丸めて涙ながらに書いた彼女の姿を想像すると胸が張り裂けそうになる。

虐待は身体的、性的暴力、心理的虐待、食事を与えないネグレクトなど多様で、何の抵抗もできない無力な者を一方的に痛めつける残酷この上ない行為である。現在、虐待されて亡くなる子どもは年に50人ほどで、週に1人くらいいる訳である。児童相談所に寄せられた虐待相談対応数は、統計を始めた1990年は1,101件で、2017年には103,260件となり、10倍ほどになっている。かつては、情報が少なかったとは言え、うなぎのぼりに増えていることに間違いない。見えない虐待は更に、膨大であろう。いつも言われることは地域社会の協力、情報と対応の迅速化である。その通りだと思うが、家庭の問題はプライバシーで阻まれ、両親から拒否されたら、踏み込んでいけないことも多いだろう。

児童虐待は小手先では解決できない、日本の社会全体の問題ではないか。弱く小さく、保護と教育が必要な者を排除し、否定し、自分の欲望を追い求める精神が社会に蔓延している。かつては「強きをくじき、弱きを助く」という言葉があった。しかし、最近では「弱きを虐め、強きに与する」という風潮が覆っている。殊に、社会的に有力な人々に、この傾向が見られる。日本の社会全体が精神的に腐敗し、悪臭が漂っているような状況である。結愛ちゃんを虐待死させた両親に責任があることは言うまでもないが、彼女の痛ましい死は、日本の「弱者無視」の文化のあり方に鋭い問いを突き付けたと受け止めるべきである。結愛ちゃんの悲痛な叫びを心に留め、私たち自身が言葉にならない人々の声を聴く耳を持ち、その人々に寄り添えるかという問いかけではないか。